

研究ノート

公共空間にみる女性表現 — 日比谷公園を事例に —

小坂美保*1

キーワード：公共空間、女性表現、日比谷公園

1. はじめに

「スタバ」の似合う場所

「スタバ女」。これは、平成 14 (2002) 年上半期の芥川賞を受賞した吉田修一の『パーク・ライフ』で主人公〈ぼく〉と恋が始まりかける女性の名称である。彼女は、「あの女」から「スターバックスのコーヒーを飲む女」、ついで「スタバ女」と〈ぼく〉の職場の先輩に命名された。その名の通り、彼女は、スターバックスのコーヒーを飲んでいるのだが、スタバの店内ではなく、日比谷公園でそのコーヒーを飲むのが日課なのである。しかし、彼女は、なぜ「スタバ女」という名称でなければならなかったのだろうか。この点に関して、「スタバ女」自身が次のように話す場面がある。

「…、あの店に座ってコーヒーなんかを飲んでると、次から次に女性客が入ってくるでしょ？それがぜんぶ私に見えるの。一種の自己嫌悪ね」
「…、たぶんみんなスターバックスの味が判るようになった女たちなのよね」
「…。別に何したわけでもないんだけど、いつの間にか、あそこのコーヒーの味が判る女になってたんだよね」¹⁾

「スタバ女」は、スタバの味が判るようになった女たちの一人でありながら、その一員でないために日比谷公園でコーヒーを飲むのではないか。同じコーヒーを飲むという行為でも、場所あるいは空間の違いによって、その描かれ方が異なってくる。

本研究の視点

本研究は、スタバと女性に関して論じるものではない。ここで問題にしたいのは、女性と場所（空間）の描かれ方である。現在では、女性が一人で店に入ったり、街中をぶらぶらしたり、公園を一人で散歩する姿は当たり前かもしれない。しかし、このような女性の行動形態については、大正時代にみられた「銀ブラ」や「モガ」の存在があり、これらを契機に多くの変化があったことはこれまでの研究において明らかにされている。ここで、少し視点を変えてみたい。というのは、「銀ブラ」や「モガ」が生まれる以前、女性がどのように振舞っていたのか疑問である。加えて、「銀ブラ」や「モガ」がそれ以前の女性との連続性がどのようなものであったのだろうか。このような疑問から、「どんなささいな事柄にも階級と性別の差異の線引きを行うのが、明治・大正という時代」²⁾に女性と都市との関係がどのようなものであったのかを、公園という空間に焦点をあててみていきたい。

2. 先行研究の検討

公共空間といった特定の空間に限らず、「女性」(像)は、さまざまところで描かれ、さまざまな視点からその意味が研究されてきた。本研究が問題としている女性表現を考える際、以下の2つの先行研究が示唆を与えてくれる。

川島は、夏目漱石の前期三部作といわれる『三四郎』『それから』『門』の物語を読み解きながら、作品中の女性表現について、「漱石」というテキストにたちあられわれてくる《女》の身体とその〈言葉〉から考察して

*1 山口福祉文化大学 ライフデザイン学部

いる³⁾。

また、平田は、近代において女性が読み書きを獲得し、小新聞等への投稿することで自らを表現しようとしていたことに着目し、女性によって表現された「声」(投稿)や「読み書き」や「小説」を分析し、女性の表現そのものを明らかにしようとしている⁴⁾。

川島、平田はともに文字で表されたテキストを分析対象としている。このようなテキストは、書き手(作者)の意図だけでなく、文字というメディアを通して、読み手(読者)が新たなイメージを付与する可能性をもつものである。特に平田の研究にみられる小新聞への投稿の分析は、投稿する女性たちの内なる声を拾い上げようとするものであり、読み書きが可能になった女性たちの表現がどの程度許され、掲載されるものかのような秩序がみられるのかといった点を詳細に検討している。川島は、漱石の作品に登場する女性を対象とし、漱石が描く近代の女性あるいは、近代に抗する女性の姿を読み取ろうとしている。両者の研究は、「女性表現」をテキストから読み取ることができることを示している。本研究においても、文学作品を対象に、公園という空間で女性がどのように表現されているかを分析していきたい。また、公園に関する写真やポスターなども分析の対象としていきたい。

ここでいう公共空間としての公園というとらえ方は、誰に対しても開かれているという意味であり、この意味での公園は、誰もがアクセスすることを拒まれない空間であることを示す⁵⁾。

3. 本研究の目的

そこで本研究では、都市にあらわれた「公園」という「公共空間」にみられる女性表現にどのような特徴があるのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、明治初期から整備され、明治36(1903)年に1つの近代都市施設としての「公園」を具現化した「日比谷公園」をターニングポイントとしながら、日本近代における公園の考察を通して、公園空間に描かれた

あるいは表現された「女性」の姿を詳細に検討していく。

4. 都市にあらわれた公共空間=公園

日本における「公園」の歴史は、明治6(1873)年1月15日の太政官布告第16号にそのはじまりをみることができる。維新後、明治政府が様々な制度の整備に着手するなかで「公園」もその一つとして整備されたのである。

布告当初の公園は、古くからの名所・古跡あるいは盛り場や雑踏広場、観賞苑地など、多くの人びとが遊観を目的として集まる場所であった。このように、当初の公園は、従来からの地に「公園」という名称がつけられたものに過ぎなかった。これらの場所の特徴は、誰に対しても開かれている空間である。従来の「盛り場」や「公園」は、多くの人びとの憩いの場所であり、日常生活に密接に結びつく空間であった。

このように、明治初期に「公園」という名称がつけられた空間は存在していた。しかし、上述したように、江戸時代からの「盛り場」や「社寺境内地」が「公園」と名称を変えて、その役割は変わらないものであった。加えて、明治初期に新たに作られた施設(空間)ではなかった。

このような「公園」の大きなターニングポイントが、明治36(1903)年のことである。この年、日本で初めて都市計画のもとでつくられた「公園」が誕生したのである。それが、「日比谷公園」である。

日本における公園整備は、明治6(1873)年の太政官布告以降、明治10年代に進められた東京の市区改正事業^{註1)}において進められていた。特に、東京は、帝都としての体裁を整える必要に迫られていた。その背景には、「欧米列強の植民地化の脅威から一刻も早くのがれ」なければならぬ国情があり、『殖産興業・富国強兵』といったハード面の充実を主な内容とする政策を進める一方で、ソフトの面、すなわち日本人の生活習慣、思想、教育、環境、身体の変更までも意図した

政策をつぎつぎと打ちだした」⁶⁾ 政府の存在であり、対外・国内政策があげられる。明治10年代から進められた東京市区改正事業は、官庁街や道路の拡張、交通網の整備など都市整備全般を請け負い、東京を「帝都」にふさわしい都市へと改造することを第一の目的としていた。そのなかで、近代都市施設としての機能をもつ「日比谷公園」の計画が浮上したのである。

日比谷公園の計画は、明治20年代に議論された市区改正事業の成果の一つである。この公園の設置は、近代に生まれた「強い公共介入」⁷⁾ という社会的技術として形成された都市計画とともに行われたものである。このように都市にあらわれた「日比谷公園」という空間は、当時の人びとにとって「近代都市」を具現化するモノであり、疑似ヨーロッパを体験できる空間でもあった。人びとは、公園に身を置くことで、あるいは公園をみることで新たな都市空間の登場を身をもって感じたといえよう。日比谷公園の計画は、市区改正事業に携わる人びとにとって、「公園」そのものをつくることを意味し、帝都「東京」の中央公園として、また時代の要求にこたえるべき公園像を国民に提示しなければならなかった。

日本における最初の近代的公園として開園した日比谷公園は、開園式の様子など開園前後を通して公園の様子が新聞などのメディアを通じて詳細に報告されている。たとえば、日比谷公園の開園日の様子は「今日開園」と題され、入園が許されていた一般の人びとの様子が次のように記されている。

「…午後一時より公衆の入園を許したれば夜に入るまで人出夥しく園内の雑沓につれて柵内へ立ち入りし者もあり多少樹木其他を損じ又は池中へ石を投げ犬を追入れし者などありて巡視の叱責に遭ひしが入園者は公德を重じ斯る悪戯を慎みて新公園の面目を保つべきに例もながら困った連中なり…」⁸⁾

多くの人びとが開園式に集まり、開園式当日は新公園を一目みようとする人で騒然としていたことがわかる。しかし、記事中の「公德」ということばにあらわされているように、人びとの公園での振る舞いに関する苦言がみられる。これは、東京日々新聞だけでなく、他の新聞、たとえば読売新聞などでも「日比谷公園ハ東京市民が公德心の試金石なり」⁹⁾ と「公德心」という言葉がみられる。このように、公園での振る舞い方によって「公德心」が身につけられているか否かの判断基準とされているのである^{註2)}。

このように、日比谷公園は日本人の「公德心」が問われるような場所であり、利用する人びとの園内での振る舞い方が非常に問題とされているのである。振る舞い方が問題視される一方で、多くの人びとにとって日比谷公園は、あこがれの場所であり、西洋あるいは近代を身近に感じられる場所であった。このような場所に人びとは、特に女性ほどのような装いで出かけていたのだろうか。

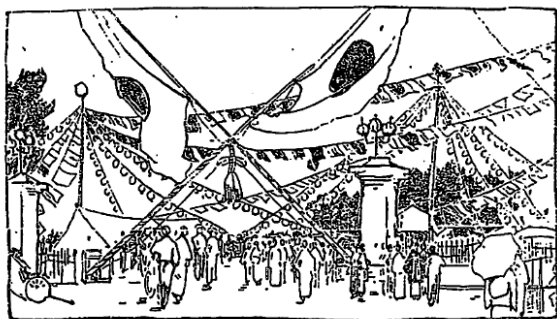


図1 日比谷公園の開園式の様子を伝える新聞

5. 公園における女性表現

一日比谷公園に着目して—

文学作品にみる女性表現

たとえば、島崎藤村が明治40(1907)年に発表した『並木』には、日比谷公園内の様子が次のように描かれている。

「美しい洋傘をさした人々は幾群れか二人のわきを通り過ぎた。昔のように内輪に歩いている娘は一人もいない。いずれも親泣かせといったような連中が、互いに当世の流行を競い合つての風俗は、はでで、ほしいままに、絵のようにも見える。色も、好みも、みな変わった。中には男にしなやかな手を預け、横からささやかせ、軽く笑いながら木陰に行くものもあった。妻とすらいっしょに歩いたことのない原は、この大胆なふるまいに怖気を震って、時々立ちどまっては嘆息した。『これが首を延ばして待ちこがれていた、新しい時代というものであろうか。』こう原は心に驚いたのである。」¹⁰⁾

主人公の旧友である「原」は、8年振りに上京し、変わりゆく東京の姿や女性の振る舞いの変化を「驚くべき事実」として目の当たりにしている。ここで注目したいのは、女性に関する記述である。「洋傘をさす」や「内輪では歩かない娘」、「男に寄りかかりながら歩く女性」という行為は、都市あるいは空間の変化によって現れてきたとみることもできる。

また、谷崎潤一郎は、『秘密』において次のように日比谷公園を描いている。

「…午後の散歩、—散歩には今日は日比谷公園を撰んだ。其處の噴水の汀にある藤棚の下には、アーケ燈の光に照らされて、月夜のやうに鮮やかな葉の影が、涼しい風に揺られながら、編み目の如く細かにそよそよと戦いで居た。ぼんやりとベン

チに憩うて居る彼の前を、いろいろの市民の群れがぞろぞろと賑やかに足音を立てながら流れ過ぎた。花やかに、しんみりと睦まじさうに寄り添うて行く若い夫婦づれ、婀娜つばい縮緬浴衣をだらしんと着流して、夜の妖精のやうにしめやかな、なまめかしい足どりで植ゑ込みの木々の繁みに見え隠れする藝者の一と組、低い鼻聲でロオレイを歌ひつつ行く中學生、鷺のやうな眞白な服装に黄金の頸飾を付けた西洋婦人、—…」¹¹⁾

谷崎の描写によれば、日比谷公園は「散歩」する場所であり、多くの人びとが集う空間であることがわかる。先にふれたように、「公德心」が問題とされる場所でありながら、「婀娜つばい縮緬浴衣をだらしんと着流して、夜の妖精のやうにしめやかな、なまめかしい足どりで植ゑ込みの木々の繁みに見え隠れする藝者の一と組」とあるように「芸者」が浴衣を着流した姿でいることのできる場所でもあったといえる。このように、谷崎が描く日比谷は、アーケ燈がともっていることから夜の公園の姿とあってよいだろう。夜の公園にいる女性は、「芸者」が主だったのだろうか。

さらに、北原白秋は、「公園の薄暮」において、日比谷公園の様子とともに女性に関する描写をおこなっている。

「ほの青き銀色の空気に、
そことことなく噴水の水はしたり、
薄明ややしばしさまかえぬほど、
ふくらなる羽毛頸巻のいろなやましく女ゆきかふ。
つつましき枯草の湿るにほひよ……
円形に、あるいは楕円に、
劃られし園の配置の黄にほめき、
靄に三つ四つ
色淡き紫の孤燈したしげに光るうるほふ
…… (省略)」¹²⁾

当時の公園には、珍しかった「噴水」とともに、「ふくらなる羽毛頸巻のいなやましく女ゆきかふ」とあるように、着飾った女性の姿が描かれている。ここでの女性は、谷崎が描いた女性と同じように、夕暮れ時の公園には、「なやましい」女性をみることができる。

写真にみる女性表現

ここでは、写真あるいは絵葉書にみられる「女性」について検討していきたい。

小説に描かれていたような「なまめかしい」女性は、次の写真にみることができる。



図2 昭和初期の日比谷公園（心字池）

この写真は、昭和初期のものであるが、女性がライトアップされた噴水（心字池）のそばに立つ姿が写されている。

しかしながら、「公德心」が問題とされる日比谷公園において、他の写真の多くが次のような着飾った女性たちを写したものとなっている。

図3は、明治36年の日比谷公園開園当初の写真である。図4・5は、明治40年代の日比谷公園の様子を伝える絵葉書である。図3～5に写っている女性は、着物をきており、図4では傘（日傘、蝙蝠傘）をさす女性が写されている。

これらの写真や絵葉書は、「写真」や「絵葉書」として多くの人びとの眼に触れることが前提として撮られ



図3 開園当初の日比谷公園（心字池周辺）



図4 明治40年代の日比谷公園（音楽堂周辺）



図5 明治40年代の日比谷公園（花壇周辺）

ているものである。特に絵葉書は、ハガキとしての役目ももっており、文字とともに「絵」が日比谷公園を伝えるものとして機能するのである。

そのような機能を考えると、絵葉書の題材とされるものは、絵葉書としてふさわしいものでなければなら

なかったといえよう。このことは、「公園」あるいは「日比谷公園」という場所にふさわしい形で「女性」の姿も描かれていると考えることができる。

同様に、明治36（1903）年に発行された『風俗画報 276号』は、老若男女を問わず多くの人びとが日比谷公園に集う様子を伝えている。



図6 日比谷公園の様子を伝える風俗画報 (276号)

図6には、西洋人と思われる女性が右端に2人描かれている。彼女たちは、公園の様子をうかがっているようにもみえる。また、左側の女性2人は、女学生のようにみえる。中央左よりの女性は、赤ん坊を連れた女性である。

このように、日比谷公園にはさまざまな女性が訪れていた。しかし、谷崎や北原の作品に描かれていたような女性を図6からみることはできない。



図7 明治後期の日比谷公園のポスター



図8 大正期の日比谷公園のポスター

図7・8は、日比谷公園のポスターである。どのような目的で、ポスターが作成されたかは、現段階では明らかにできていないが、明治後期と大正期のものでは、描かれている人びとの様子が少し異なっていることがわかる。

大正期のポスターは、洋装の人びとが多くなっている。また、多くの女性が描かれ、どの女性もきれいに着飾り、子どもを連れての散歩や日傘をさしての散歩を楽しんでいる様子が伝わってくる。

風俗画報の絵にも洋装の女性は描かれていたが、図7・8のポスターは、日本人の女性が洋装をしている姿が描かれている。また、描かれている人びとすべてが、盛装に近い服装であり、「日比谷公園」という場所が、人びとにとって特別な場所であるというメッセージが強く伝わってくる。

6. 女性にとって公園にでかける意味

作家の永井荷風は、東京のまちをよく歩き、散歩随筆の嚆矢と称される『日和下駄』や『断腸亭日乗』といった作品を残している。荷風の作品には、東京の公園が数多く登場する。興味深いことに、荷風の描く公園には、2つのタイプが存在している。1つは、浅草公園や上野公園といった社寺境内地に由来をもつ公園である。もう1つは、「日比谷公園」に代表される明治30年代以降、新たに作られた公園である。荷風は、ど

ちらかといえば、浅草公園などの盛り場と縁のある公園を好んでいたようである。そして、作品において登場する女性も、公園ごとに異なっていた。たとえば、浅草公園に登場する女性は、多くが芸者であり、どこかなまめかしい雰囲気醸し出すものであった。一方、日比谷公園に描かれる女性は、夫婦連れであったり、女性同士で散歩をしている、といった様子である。

日比谷公園の開園から約30年後の資料となるが、公園利用者に関する興味深い調査がある。昭和5(1930)年に発行された今和次郎による『モデルノロジオ』¹³⁾である。ここでは、「各公園散策者の男女の組の具合」の採集が掲載されている。採集項目として、「1. 散歩、2. 何人連れで散歩していたか、3. 一人の散歩、4. 男女だけで散歩、5. 男同士の散歩、女同士の散歩、6. 子供連れ或は家族的散歩、7. 各公園の個性」が挙げられている。採集結果よりも、こちらの項目の方が重要である。「男女だけの散歩」や「女同士の散歩」という行為が、日常的にみられるようになったということである。また、「公園」が散歩をしに行く場所と認識されているのである。

日比谷公園以前の公園は、社寺境内地や盛り場に縁をもち、社寺へのお参りに行く、盛り場へ出かけ遊興する、といった空間であった。しかし、「公園」という機能が付与され、期待された日比谷公園の誕生以降、人びとにとっても公園の認識が変化してきたといえる。

図6・7・8にみられるように、日比谷公園に描かれる女性の姿は、当時の女性の姿を反映しているとはいいがたい。しかし、日比谷公園は、それまで抽象的なものでしかなかった近代的な公園を視覚化し、空間化したのである。この都市の新しい空間は、利用者に公園にふさわしい振る舞いを強いる空間でもあった。図6・7・8に描かれた女性は、日比谷公園において求められる女性の姿、つまりモデルとして提示された女性像なのではないだろうか。

また、図3・4・5といった絵葉書(写真)は、当時の写真技術からすると、撮影用に準備された場面かも

しれない。しかし、このような写真が撮られることによって、多くの人びとに「日比谷公園」にふさわしい格好や振る舞いが伝えられるのである。絵葉書の多くは、女性が写っているものである。女性が、着飾って堂々と外出する姿は、当時の女性たちにとってどのようなものとして受け取られたのであろうか。

写真やポスターにみられる女性の姿は、当時の女性たちを表したものには違いない。それらは、理想的な姿であったり、求められる姿であったかもしれないが、公園という空間に求められた女性像があったということである。そして、女性が公園に行くということは、公園にふさわしい格好や振る舞いを体現しながら、自らも他の人びとにとってのモデル(理想とすべき像)としての役割を果たすことにつながると考えられる。

7. まとめにかえて

行動とは「規則」を再生産する行動様式、正常な規範に従った振舞いをするを通じてその規範の効力をさらに強化していく行動様式のことである。加えて、行動は、すでに確立されている規範的な意味を反復することによって、それを正統化していくものである¹⁴⁾。この「行動」が意味するところは、人びとが正常な規範に従うことによって、公共性や秩序が保たれるのである。しかしながら、このような行動は、人びとの「身体に向けられる視線」が大きく影響している。私たちは、情報としての身体あるいは行動(行為)に自らの行動の多くを委ねている。私たちは、未知の空間に出遭ったとき、そこでの振る舞い方を同時に存在する他者の振る舞いから学び取ろうとする。そして、情報としての身体(振る舞い)は、写真や絵といったメディアを通して多くの人びとに伝達される。その場になくとも、メディアを通して、人びとは、ある空間・場所での振る舞い方を知ることができるのである。

日比谷公園といった都市に新たにあらわれた空間は、人びとに外見の重要性を気づかせる。写真や絵にみられる女性の姿は、当時の女性の一端をあらわしている

ことに違いない。そして、女性が写真や絵において表現あるいは表象されることによって、求められるべき女性像が示されていたと考えることができる。

今後は、分析対象とする資料・史料をより収集し、描かれなかった女性像と描かれた女性像の違いについて検討していきたい。

〔註〕

註 1 市区改正事業とは、現在の都市計画であり、さまざまな都市整備に関する事柄がこの事業で進められていた。

註 2 「公德心」を欠く行為の多くは、芝生地に下駄足駄を履いたまま入る、草木花を毀損することであった。

【引用文献】

1) 吉田修一; パーク・ライフ, 文藝春秋, 2002, pp.31-32
2) 石原千秋; 百年前の私たち 雑書から見る男と女, 講談社現代新書, 2007, p.29

3) 川島秀一; 漱石の女性表現—文化テキストとしての〈漱石〉—, 山梨英和短期大学紀要, 34 : pp.61-73, 2000
4) 平田由美; 女性表現の明治史—樋口一葉以前—, 岩波書店, 1999
5) 齋藤純一; 公共性, 岩波書店, 2000, p.ix
6) 國學院大學日本文化研究所編; 近代化と日本人の生活, 同朋舎出版, 1994, pp.5-6
7) 渡辺俊一; 「都市計画」の誕生, 柏書房, 1995, p.5
8) 東京朝日新聞, 明治36(1903)年6月3日, 朝刊
9) 読売新聞, 明治36(1903)年6月7日, 朝刊
10) 島崎藤村; 並木, 新潮社, 1907
11) 谷崎潤一郎; 「秘密」, 刺青・秘密, 新潮社文庫, 1967
12) 北原白秋; 「夜の公園」, 東京景物詩, 岩波書店, 1909
13) 今和次郎・吉田謙吉編; モデルノロヂオ(考現学): 復刻版, 学陽書房, 1986
14) 齋藤純一; 公共性, 岩波書店, 2000, p.52